

第十五回 忠順大賞

(令和二年)

※コロナ禍で家にいる時、友達のことを強く思う。「今更気付く」下の句の表現で、侑奈さんの思いがよく分かります。

※今はもう宇宙時代です。年こしを宇宙でやろうとする発想が面白いです。一、二、三で家族みんなが飛び上がる。楽しかったね。

堤小五年 成瀬 心花  
じいちゃんとビデオ通話でほっこりと  
顔が見えると会いたくなるな

度)

入賞作品

豊田市教育委員会賞

駒場小二年 小山 陽愛

すなあそび山をほりほり妹と

会長賞 銀賞

駒場小三年 神谷 麻衣

会いたいよおばあちゃん

顔を見て話せる日まで元気でいて

ね

※コロナ禍で施設や病院にはなかなか行けない。最初の「会いたいよ」の言葉が

いきている。おばあちゃんへの思いがよく分かる。

堤小六年 中嶋 七海

冬の朝友の顔見て紅き鼻

笑いととも仲良くなるね

※思い切りグランドを走り回ったね。ほっぺたも鼻も赤くなっていた。「笑いととも」が仲の良さを強調しているね

小学生の部

豊田市長賞

堤小一年 古賀 新大

おとうとがぼくのせなかののってき  
た  
おんぶバツタになっちゃった

※ねころんでみると、弟がせ中ののっかっ  
てきた。「おんぶバツタ」という表現が  
面白い。

中日新聞社賞

堤小二年 清水 咲良

友だちと木のみあつめをしていたら

赤青いろいろビーズみたい

※公園や林で木の実を友だちとひろった。  
赤青、色いろいろいっぱいあった。「ビーズ  
みたい」のたとえがいい。きれいだね!!

会長賞 金賞

堤小三年 日橋 星姫

空中で年こししたくてジャンプする

家族みんなでも楽しい

優秀賞(三名)

※水を入れたバケツにロウバイの花を入  
れたそうだね。その水がおった。下の  
句から氷の中のロウバイの花のきれい  
さがよく分かる。

※コロナ禍でじいちゃんと、ビデオ通話で  
お話をした。笑顔を見ていたら、急に  
会いたくなった。「ほっこり」との表現が  
とてもいい。

駒場小六年 近藤 緋実莉

コロナ禍で自粛生活いやだけど

おかげで増えた家族の会話

※コロナウイルスはいやだけど家族一緒に  
家にいる時が多く、会話が增えた。  
「おかげ」と前向きにとらえたのがいい。

中学・一般の部

\*\*\*\*\*

豊田市市長賞

前林町 酒井 雅子

海底に白き砂礫(されき)のゆるるるごと

気丈な姉もわが名を忘る

※上の句によって、姉の認知症の進行が行ったり来たりする状況を上手く表現している。今は私の名さえ思いだせない。

豊田市議会議長賞

前林中三年 渡辺 智美

苛立ちを家族にぶつけるその日々

素直に言えないたった一言

※誰が悪いというわけでも無いのに、イライラしてしまう。「たった一言」の一句が読み手に連想させる。上手いですね。

豊田市教育委員会賞

前林中三年 近藤 瑞季

うるさいな親の言葉にいらつく日

でもそんな日も幸せな日々

※親から何かと言ってくれることをうるさく感じることもある。下の句によって、瑞季さんの人としての豊かさを感じます。

中日新聞社賞

駒場町 清水 宣子

病室の窓の青空切り裂いて

飛行雲ゆくその先見えず

※二句三句は病室の四角の窓を連想させる。上手い表現です。爆音も聞こえない高い空に飛行雲が一線を。五句は余韻がいい。

会長賞 金賞

前林中三年 加藤 春菜

歩くのが当たり前だと思つてた

今は歩けずわが祖母は

※上の句は、お祖母ちゃんはいつも元気と思ひ込んでいた。そして、下の句も状況だけを表現している。読み手に訴えるものがある。

会長賞 銀賞

前林中二年 横川 真侑

父に似て私もコーヒー好きになり

渋い顔まで似ているふたり

※親子はよく似ると言われる。私は自分でも感心する。下の句の「渋い……」は真侑さんが父を大好きだということがよく分かる。

会長賞 銅賞

前林中二年 川合 夏菜

私にはいつも祖母がついている

手作りマスクあたたかいなあ

※コロナ禍であるためにマスクが何枚もいる。第五句によって、祖母に感謝、幸せを感じている夏菜さんの様子が浮かんできます。

優秀賞(三名)

前林中三年 甲村 梨乃

休校(やすみ)明け久しぶりに友だちと

何気ない会話幸せの瞬間(とき)

※コロナ禍で急に休校になってしまった。休校が明けて久しぶりに友達と休み中の分までおしゃべりをした。第五句が生きていていいですね。

前林中一年 松浦 凌雅

おそう煮と楽しく踊る花がとお

朝から和み笑顔こぼれる

※上の句の「踊る花がとお」の視点がいい笑える、いい正月が家族に広がっていく様子が分かります。素敵な家族の風景です。

前林中一年 佐藤 光輝

母さんの腰がこわれて家事大変

自分の服を干すのがつらい

※上の句の「……家事大変」の表現から、家族が大騒ぎの様子がよく分かる。僕もやらなければ。洗濯物干すだけでも大変だった。

\*\*\*\*\*

第十五回「忠順大賞」に一五五三首の作品をいただくことができました、

二月二日事務局での一次審査を経て久米翠雲先生による最終審査により以上の二十名の入選者が決定しました。先生には選評も添えていただきました。

事務局での一次審査、緊張する作業でもありますが、心豊かな時間を頂きます。今年度は、コロナ感染拡大防止のため、学校生活も休校期間があり、行事なども縮小、中止も多く大変だったと思います。

自粛生活も長い中、家庭生活でのなんでもない出来事から生まれてくる作品の数々。久米先生の選評にもありましたが、素敵な家族の風景、心温まる人と人との繋がりが伝わってくる様々な短歌がとても多かったように思います。

何度も書き直しながら、丁寧な字で書かれた沢山の応募作品を拝見してありがとうございますと、コロナ禍の中で大変お忙しい中、指導・協力して頂いています小・中学校の先生方には感謝しかありません。ありがとうございます。また、地域内外から応募して頂いた大勢のかたに感謝致します。

(事務局 川村